

## 巻頭言 「文化」の政治性をめぐって

著者	清水 均
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.24
号	No.2
ページ	3-3
発行年	2015-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1477/00002775/">http://id.nii.ac.jp/1477/00002775/</a>

<b>Title</b>	巻頭言 「文化」の政治性をめぐって
<b>Author(s)</b>	清水, 均
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.2, 2015.1 :3-3
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5252">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5252</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 「文化」の政治性をめぐって

「日本文化学科」という学科に教員として所属している人間は、研究や授業においては当然のこととして、その他、広報的な発信をする時や学生をはじめとする誰かと何気ない会話をする際にも、「日本文化」ひいては「文化」という概念に関して、常にその政治性について問われ続けることになる。そうした状況下であって、ここ数年の私の関心は、日本における「文化」概念の成立事情を検証することと、その上で、現代文化、就中「ポップカルチャー/サブカルチャー」における「文化」に纏わる政治性を開陳するところにある。そして、こうした私の「文化」の政治性に対する関心は、昨年上梓された松宮秀治氏の著作の論点と重なるどころ大であると言える。

「国民」や「民俗」が幻想であるなら「文化」も幻想でなければならないが、今日でもそれは幻想としてのイデオロギー性を暴露されることもなく、いやむしろより実体的なものとして信仰を享受しつづけている。「文化」と「国民」はともに同じ近代のナショナリズムの価値体系のもとに整備された観念である。その一方が「幻想の共同体」としてイデオロギー性が暴露されることになるなら、「文化」のイデオロギー性も同じように暴露されなければならないだろう。しかし、そのイデオロギー暴露を押しとどめているのは「文化」概念の脱価値化が十分に浸透しているという現在の新文化科学の信念、つまり「文化」はすでにニュートラルな概念になっているという信念であろうが、その正否を問うのはもっと先になる。

(『文明と文化の思想』2014年7月 白水社)

「ポップカルチャー/サブカルチャー」の領域の問題は今はおくとして、「文化」概念の成立事情に係る「文化」のイデオロギー性の「暴露」については、拙論「近代日本における「文化」概念の成立(1)－「文明/文化」から「文化/教養」へ－」(「聖学院大学論叢第21巻第2号」2009年3月)において、西川長夫氏の論考を引用しつつ触れている。それゆえ、喫緊の課題は松宮氏の指摘する「文化」はすでにニュートラルな概念になっているという信念がもたらされた所以を検証することにある。私見では大西祝に触発される形でのマシュー・アーノルド経由の徳富蘇峰の「culture」理解に重要な契機を見ているが、そのことについては次に予定している論考、「近代日本における「文化」概念の成立(2)－徳富蘇峰の「culture」受容におけるマシュー・アーノルドの関与－」(仮題)で論ずる予定である。